山形県酒田市飛島における通過儀礼の変遷
―離島の過疎化・少子高齢化について

尤　　銘　煌
（山形大学留学生センター）
杉　山　　誠
（酒田市飛島診療所）

一．緒言

この半世紀あまりの間に、人々の考え方や物事に関する価値観などが著しい変化を遂げた。それは、社会情勢の変化と不可分であり、もちろん、人生における大きな節目である通過儀礼も例外ではなく、時代とともに変貌の波に押し流されてきた。それらが、飛島という本土から海で隔絶された小島ではどのような変遷の過程をたどってきたかを分析してみたい。

二．飛島の概況

１．気象・地理と生活環境

飛島は、山形県酒田市の北西39キロに位置し、面積2.32km²、周囲10.2kmで、酒田港から定期船で約90分かかる自然豊かな島である。定期船は酒田港から発着し、多少の季節的な変動はあるが、基本的には一日一便であるから、飛島から酒田へ行っても日帰りはできない仕組みになっている。

日本海沿岸を流れる対馬暖流の影響で、年間平均気温は12度、積雪も10センチを越えない程度で、県内では最も暖かいところといわれている。反面、冬期には水温の低下とともに海流の停滞が寒流様となり、その影響から島には南方系、北方系の植物が入り乱れ、植生豊かなところである。島には勝浦、中村、法木と三つの集落があるが、互いに一番隔たったところでも、徒歩で40分もあれば行ける距離である。

島の最大の敵は、冬期に吹きすさぶ「風」である。一月など船はその月の60%以上の便が欠航することを覚悟しなければならない。その突風を避けるために、全国大半の島がそうであるように、飛島でも家が島沿いの道をはさむように、ハマ側とオカ側に並んでいる。ハマ側はとった魚を処理・収納したり、魚網の繕いをする作業場に当てながら風を遮り、オカ側は母屋で家族の居住や民宿の客の宿泊に当てたりしている。

島にはいくつかの全国的に稀な記録みたいなものがある。

まず、駐在所には警官が一人配属されているが犯罪らしきものといったら、過去に遊

魚客の釣竿の紛失が１件あった程度である。次に、交通信号はないから、都会のように赤信号をいらいらしながら待つことはない。もちろん交通渋滞などという言葉は島にはない。

魚屋もない。住民が漁った魚を互いに分け合う習慣があるからである。コンビニもない。当然、パチンコ屋もレンタル・ビデオ屋もない。

また、これまで「子育て」などのために、ほとんどの島民が酒田市内にも家を構えてきた。マルチ・ハビテイションである。島民の、本土での持ち家率は全国でもダントツであろう。

２．経済

島の経済は、基本的には漁業と観光と自家用の農作物の栽培より成り立っている。

漁業は「庄内に金の島あり」といわれたほどの豊かな漁場があり、ダシ用の炭火焼き飛魚、イカ、メバル、サザエ、アワビ、各種海草類などが四季折々とれる。

観光には旅館・民宿が幾軒かあり、これまで何度かの離島ブームで沸き返ったこともある。

観光の中でも、遊魚とバードウオッチングにはとりわけ適している。とくに観鳥のポイントとしては、日本有数のところとして知られる。270余種の鳥が観察できるといわれ、リピーターも数多い。

鳥の中でもウミネコは国の天然記念物にも指定されている。ウミネコは、カモメの一種で、「ミャーオ、ミャーオ」という鳴き声がネコに似ていることから名付けられ、毎年2月頃に約２，３万羽が飛来してきて繁殖し、子育ての役目が終わる７～８月頃には、また島を離れて行く。

島には、農耕地が50haあった。しかし、人口減少、高齢化、労働力不足などにより荒れ果て、現在実際に耕作している畑地は1/3以下に減少している。里山の荒廃である。観光シーズンは、６月から８月ぐらいまでがピークである。島で旅館経営を専業にしている家はただ一軒で、それ以外はやはり漁業に頼って生計を立てていかなければならない。しかし、漁業、観光のいずれもが、人口の減少と高齢化にともなう後継者不足に悩んでいる。ではその人口動態は・・・

３．人口構成の推移

古くから「飛島は千人を越すと喰えない」といわれ、明治時代以前の島の人口はほぼ千人のラインを守ってきたが、明治以後になると人口が増え続け、1940年（昭和15年）には過去最多の1,788人を記録した。[1]戦時中の「産めよ！殖やせよ！」という国策とあいまち、漁業の担い手を確保するために、地方の貧しい家の子どもを積極的に養子縁組みさせたりした。それがまた人口増加の要因にもなった。

1 長井政太郎『飛島誌』国書刊行会、1982.P.101.

しかし、世の移り変わりとともに、動力船の導入、漁獲規制、漁価低迷、職を求めたり、進学のために子弟が本土への流出したりして、人口が急速に減り始め歯止めがかからなくなった。

現在、飛島に住民登録しているのは301人であるが、常時島に住んでいる人は250人にも満たないであろう。このように過疎化の速さは極端で、たった66年あまりの間に約5/6の住人が島から消えてしまったことになる。

その実情は、以下に上げるいくつかのデータでも如実にあらわれている。
現在島の平均年齢65.8歳で、高齢化率は59.4%である。[2]総務省統計局によると、全国の平均年齢は43.9歳で、高齢化率は全国が21%であるが、山形県の高齢化率は26.4%で秋田、島根、高知、鹿児島、山口についで全国第6位である。[3]それの県全体と比べても、飛島がいかに高齢化がすすんでいるかがわかる。

それにともない、少子化も極端で、飛島小中学校のうち、2000年には創立124年の伝統をもつ小学校が生徒数０で休校となり、2003年には創立56年の歴史をもつ中学校も、後を追うように休校になった。

これらの減少は、もはや少子高齢化というよりは「無子高齢化」というのがふさわしいくらいで、それにともないさまざまな問題が投げかけられ、それらが、将来の島の命運を左右しかねない。それらは何か。

４．伝承文化の衰退

高齢過疎により、経済の破綻、人口構成のいびつ化は、もはや共同体としての島の維持を危うくさせている。それと同時に、これまで海で隔絶され、それだけに永年にわたり育んできた島特有の貴重な風俗・習慣など数え切れないほどの伝承文化をそれを引き継ぐものがいなくなり、みるみるうちに消え去ろうとしていることを意味している。

このような島の社会現象を背中に感じながら、本論文では、2005年６月３日からの３日間と2006年８月14日からの３日間に飛島で及び2005年６月29日に酒田市の龍厳寺で行った現地調査を踏まえ、特に飛島における通過儀礼に絞って、その変遷過程を探りたいと思う。

三．飛島における通過儀礼の変遷

1．出産儀礼

a.帯び祝い：妊娠５月に実家のお母さんからさらし１枚をもらうだけで特別な祝いはな

2「飛島　年代別人口リスト」とびしま総合センター、2006.8.14
3「年齢別人口の割合―都道府県（平成17年）」総務省統計局
http://www.stat.go.jp/

かった。

b.誕生祝い：長男の時にだけ祝って紅白の餅をついて親戚に配る。女の子の場合は赤飯を炊き、近親者を呼んで振舞った。

c.おぼやき：子どもが生まれて21日目に産婆さんや親戚縁者などを招いて祝った。赤飯、紅白の餅を参列者に配った。妊婦は実家で、いわゆる里帰り分娩をして、おぼやきの日に赤子を連れて帰ってくる。

2．幼年期と年齢に関する儀礼

a.お七夜、命名式、お宮参り、七五三などの儀式は特に行われなかった。非常に厳しい生活環境の中では、子どもは儀式よりも先に、とにかく健やかに育てばよい、という。子供が初めて産土神や氏神にお参りするお宮参りの風習は江戸時代から始まった。もともと武家や貴族社会の儀式である七五三が商業化して華麗な風習となったのも江戸時代からであるが、都市で生まれたこれらの新しい風習は、飛島までは及ばなかったとも考えられる。

b.お食い初め：男の子は生まれてから100日目に、女の子は生まれてから110日目にタイのいわゆる尾頭付きと赤飯を出し、赤ちゃんに食事のまねごとをさせる。赤ちゃんが将来、食事に困らないようにとの願いが込められた儀式である。

c.初節句：端午やひな祭りなどの初節句には、嫁の実家が鯉のぼりや雛人形を贈って祝ってくれる。財力のある家では、嫁の実家の人たちを招待したりして、子どもの無病息災を祈念した。現在島に子どもが極端に少なくなってしまったが、それでも酒田市内に住んでいる孫などの成長を願うかのように、何軒かの家で鯉のぼりをたてたりしている。また、旧暦の５月５日に端午の節句には、魔除けのため、菖蒲と蓬を軒先にさして、菖蒲湯に入り、笹巻きを作る。

d.初誕生：誕生日前に、子どもに１升餅を背負わせて転ばせる。子どもが丈夫に育つように行う儀式である。１升餅は一生餅を意味して、一生に食べ物に困らないようにとの願いが込められている。

e.成人式：かつて成人のあかしには、わかぜしゅう、青年団、消防団への入会や徴兵検査などがあったが、現在では、1949年に国が１月15日を成人の日として設定された成人式がそれにとって代られている。頭初成人式は飛島で行ったが、1950年に酒田市と合併してから飛島の成人式は酒田市で行うことになった。酒田市市役所の担当者によると、2005年度に酒田市で行った成人式の参加者の中に飛島出身者は一人もいなかったという。

f.厄払い：男は7,13,25,42歳で、女は7,13,19,33,37歳で厄払いを行う。中村地区では、1月11日に神社で合同厄払いが行われているが、勝浦と法木にはこの風習はなく、個

人で行う。

g.長寿の祝い：かつては、61歳に還暦、77歳に喜寿、88歳に米寿、99歳に白寿とそれぞれの人生の節目に長寿を祝って盛大に祝宴を催したが、最近では、神主の御祓いだけで済ませている。

3．結婚儀礼

昔、結婚儀礼は３日間ぐらいかけて盛大に行なわれた。婚礼の日取りについては、６月前後から12月中旬までは、イカつり船で北海道方面へ出稼ぎに行くものが多かったので、その時期をはずして結婚式を執り行う家が多かった。結婚式当日に道路の脇にたくさん綱を張って、綱の真ん中にやかんやバケツを吊り下げ、その中に酒を入れないと、嫁を迎えにくる人たちを通さない。また、迎えにくる人たちは顔に炭を真っ黒く塗られた。簡単に嫁を渡さないという儀式であった。結納品は２，３着の着物と白足袋。それに少しばかりのお金であった。嫁入り道具は箪笥、鏡台、柳ゴウリ、布団などであった。結婚３日目に、ついた餅を持って里帰りをして、食事が済むと婚家にすぐに戻った。島内結婚が多かったが、昭和40～50年以降、島に戻らない若者が急速に増えたので、島内結婚が難しくなり、自然、島外に相手を求めるようになった。現在結婚式は100％酒田市内の結婚式場で行い、結婚儀礼も他の都会地と変わらなくなり、島の特徴は失われた。

4．葬送儀礼

飛島には、神社が五つある。勝浦には郷社遠賀美神社（10級社）、無格社遠賀美神社（14級社）と、中村の小物忌神社(4級社)。法木の八幡神社（10級社）と高森神社（11級社）で、寺は円福院（勝浦）と多宝寺（法木）の二寺がある。神式で葬儀を行う世帯は５軒だけである。他世帯はすべて仏式で葬儀を行う。

1996年に円福院兼多宝寺の進藤慶深元住職が90歳で亡くなってからは飛島で葬儀を行うことが少なくなり、特に４～５年前からは飛島で葬儀を行うことはほとんどなくなった。元住職の息子は鶴岡市のある真言宗豊山派の永福寺に所属するので、距離、宗派などの関係上で元住職が亡くなってから、飛島の葬儀は円福院及び多宝寺と同じ真言宗智山派である酒田市龍厳寺の住職に依頼することになった。また、『飽海郡誌』によると、もともとは円福院及び多宝寺は寛延3年から酒田市龍厳寺の末寺であった。[4]

現在、飛島の病人の99％は酒田市内の病院で亡くなるので、飛島の火葬場（昭和41年に建設）はほとんど使われていない。酒田市内の葬祭センターで葬儀を行ってから遺体は火葬にふされる。そして、遺骨を飛島へ持ち帰って埋葬する。埋葬前におばあさんたちが念仏を唱える。一部の人の遺骨はそのまま龍厳寺内の墓地に埋葬する。飛島で病人が急に亡くなった場合はまず遺体を火葬してから遺骨を船で酒田市へ移送する。そして

4 斉藤美澄『飽海郡誌（下）』山形県飽海郡役所、昭和48年、pp.288-pp.289.

飛島で葬儀を行う場合と酒田市内で葬儀を行う場合の主な差異

項目		飛島で葬儀	酒田市で葬儀
1	戒名	進藤慶深元住職は飛島の出身なので、戒名にはほとんど「院号」を付けた。戒名代は葬儀の布施に含まれていた。	龍厳寺では、通常、院号を付けず、居士、大姉（戒名代：15万）、信士、信女（戒名代：5万）
2	墓地	墓地は無償	龍厳寺内の墓地は１画30～50万円（永代供養料）で永福寺では、約６万円。
3	位牌を祀る開山堂の費用	開山堂の費用は無料	龍厳寺では、開山堂の費用は約30万円。永福寺では、約17万円。
4	葬儀の順序	火葬してから葬儀	葬儀してから火葬
5	法事、供養	七日、三十五日、四十九日、百日に別々に飛島で行う。	毎年３月の春の彼岸の時に飛島で合同供養・法事を行う。葬儀当日に七日、三十五日、四十九日、百日の法要をまとめて行う。
6	葬儀の協力者	隣組、身内・親戚	葬祭センター
7	葬儀の日日	亡くなってから３日目、７日目、寅の日には葬儀を行わない。	友引の日だけ葬儀を行わない。
8	香典返し	最初は饅頭だけであったが、その後は住民の実用性を考慮した結果、砂糖をつけて返すことになった。	商品券で香典半返し
9	葬儀後の清め	玄関に餅をつく臼を逆さまにして上に紙を置いてその上に味噌と塩を置く。家に入る前に手を洗い、味噌と塩を舐めて口の中を漱ぐ。お墓から帰ってきたら、住職より祓いを受ける。	葬儀センターが準備した塩
１０	葬儀の料理	山盛りの赤飯、豆腐、餅に人参の白和え、飛島で採った野菜など	葬儀センターが準備した一般の料理
１１	通夜の料理	うどん、酒、わさび、きのこ、油揚など。また、参列者にオコワを配った。	葬儀センターが準備した一般の料理
12	供養及び参列者の服装	初七日に施餓鬼の供養及び葬儀の時に親戚の参列者と仏が「みかくし」という三角形の布片を額に付ける。	喪主の要望に応じて行う。
13	仏の衣装	近隣たちが白いさらしで帷子を作って仏に着せる。	葬儀センターが用意した死装束。
14	葬列	土葬の時には隣組が協力して野送りを行った。	野送りは行わない。

酒田市内で葬儀を行ってからまた遺骨を飛島へ持ち帰る。近年、島の墓を見守る人がだんだん少なくなってきたので、墓を酒田市内へ移す人も増えている。

四．考察

現地調査結果により、飛島における人生儀礼はほとんど崩壊したことがわかった。永年、飛島に妊産婦がいなくなったため、出産儀礼及び幼年期に関する儀礼はほとんどなくなったし、人生の最大の節目である結婚式と葬式も酒田市に移った。昭和40年代までに各集落に一人の産婆さん（中村地区の産婆さんだけが無免許）がいた。産婆さんがいなくなるにつれて、次第に出産を酒田市内の施設で行なうようになり、それ以後島内での分娩はない。本土で生まれた子どもは、ほとんど現地で育つことになり、島には戻らなくなった。そのため、飛島の伝統的な出産儀礼も消滅した。現在、１歳と４歳の二人の子どもが飛島に住んでいるだけである。この調査結果を踏まえて以下のような考察をした。

1.飛島における通過儀礼の特徴：

a.現在飛島に残っている人生の通過儀礼は端午の節句、厄払いと長寿祝いだけである。本来、端午の節句は奈良時代に中国から日本に伝わってきた病気や災厄をさける行事であった。端ははじめという意味で午（ご）は五（ご）の音と同じである。もともと端午の節句は毎月の端（はじめで）の午（五）の日に行われた厄払い儀式であったが、やがて季節変化の境目で病気にかかりやすい旧暦５月５日になった。鎌倉時代の武士政治では、菖蒲は尚武と音が通じるため、端午の節句は尚武の節日として盛んに行われた。端午の節句は子どもの日として立身出世を願う「鯉の吹流し」を立て、「武者人形（五月人形）」を飾るようになったのは江戸時代からである。飛島では、子どもがいなくなったが、端午の節句の本来の儀式（魔除けのため、菖蒲と蓬を軒先にさして、菖蒲湯に入る。笹巻きを作る。）が残っていることは実に興味深い。

b.日本全国に普及している厄払い儀式に関しては、地方によって厄年の年齢は多少異なるが女性は19、33歳、男性は25、42歳が一般的である。厄年は陰陽道の柱となった十二支干との考え方との結びつきが強い。生れた年の支干を前に付いた厄を祓わないといけないというのが本来の意味であったが、現在では特に男子の42歳が「死に」と、女子の33が「散々」に通ずる語呂合わせによって大厄とされて大事に行われるようになってきた。「厄年」は本来「役年」であるというもう一つの説もある。男女ともに一定の年齢に達したら神事の仕事に参加することが義務付けられていた。飛島では、厄払いの年齢は男子は7,13,25,42歳で、女子は7,13,19,33,37歳である。厄年の回数が他地方よりも多いことが特徴である。

c.長寿祝いは厄年と表裏一体のものであった。特定の年齢にあたって息災を祈り祝う儀式である。中国の影響を受けながら、喜寿、傘寿、米寿、白寿などの祝いは昭和時代になってから語呂合わせの結果生まれた儀式であると思われる。現在飛島では、長寿祝いは簡素化され、神主にお祓いをしてもらうだけですますようになったという。これは、かえって本来の儀式の姿にもどったともいえる。「板子一枚下は地獄」といわれるように、船の板一枚の下には厳しい海があるので、漁師はふだんから命がけで操業している。そんな訳で、漁村である飛島では、不幸を忌み嫌うという風習が一層強い、そのため、ほかの通過儀礼が廃れていっている割には、厄払いの儀式だけは、最後まで根強く残っているのだということが証明できた。

d.漁村のもう一つ主な特徴は、助け合いの精神である。相互扶助、無尽、結いとも言われる。なぜなら、漁師の仕事は個人ばかりではなく、共同で行なわれることが多いからである。季節や天気などによって漁獲量が変わる。大漁の日もあるし漁がほとんどない場合もある。漁師の生活は常に不安定な暮らしの中にある。特に、現在では、漁獲量の減少とともに外国からのたくさんの安い輸入魚が漁師の生活を脅かしている。他方、経済力さえあれば、何でも買える時代になった今では、助け合い精神は過去と比べるともかなり薄くなってきた。一方、通過儀礼の中に地域社会における助け合い精神を最も発揮できる儀式は葬儀であるとよく言われる。村八分と言うように冠・婚礼・建築・病気・水害・旅行・出産・年忌の付き合いは村からはずされても葬儀と火事だけは相互扶助を止めることに含まれなかった。飛島における相互扶助精神は葬儀の中にある香典の金額からもうかがえる。一般に訃報をもらった人は２～３万円で、近親は約５万円、職場関係者は約５千円ぐらいといわれている。この額は、他地域よりも遥かに高い。

2.通過儀礼の変遷がもたらした社会問題：

a.飛島の葬儀は、元住職が亡くなるのにともない、葬儀の場所が飛島から酒田市内に移った。その結果、飛島ではかつて近親や隣組などの助けをかり、経費があまりかからない自宅葬儀がとり行われていたものが、高額な経費のかかる酒田市内の葬祭センターに斉行を全面的に依頼するようになってしまった。伝統的な葬儀は、互いの社会的な地位の調整、人間関係の再確認及びそれらを強固にする場所を提供してくれたが、葬儀業者に委ねられることによってその機能は薄くなった。葬儀が商業化した結果、飛島の葬儀も日本全国各地における都市の葬儀方式と何ら変わりなくなった。飛島にとって元住職は大きな役割を果たしていたことがうかがえる。元住職は飛島での跡継ぎの人

がいないため、元住職が亡くなると飛島の伝統的な葬儀の意味もほとんど見失われた。

b. 永眠の場所である墓地は無償であるにもかかわらず、墓を酒田の龍厳寺か鶴岡市の永福寺に移転する傾向が強くなってきた。特に、32世帯の代々墓地を擁していた中村集落では、去年から墓の移転がしげくなり、現在10戸の代々墓地しか残っていない。つまり、2年もたらずの間に2/3以上の墓地が島から離れたことになる。代々墓地の減少速度は、人口減少のそれよりも著しい。住人の減少により、墓を守る余裕がなくなったからだと中村の太田区長はいう。確かに、足腰が思うようにならなくなった高齢者が山の中腹にある墓所まで参拝にいくことは容易なことではない。さりとて子どもたちは島に住んでいない家庭が多いから、墓を守ってくれるものも少ない。しかし、住民のこころのよりどころである代々墓を移すことは、住民の心の過疎化に拍車をかけていることになる。（写真参照）

写真説明：墓の離島により墓石は取りはらわれ、礎だけが残っている。
その背後に先祖代々の墓がひっそりと立っている。

墓の離島は、島出身者の里帰りにも少なからぬ影響を与えてきている。正月と盆どきは、日本最大の民族移動の時期といわれ、毎年その混雑状況が、テレビなどで中継される。しかし、飛島では、冬は海がシケで欠航が続き、正月には簡単に島に近づくことはできず、自ずと島への里帰りは盆に限られてくる。元来、お盆には先祖の霊が子孫を守るために故郷に帰ってくると考えられている。しかし、お盆は単なる先祖の霊を供養するだけの行事ではない。親族が一堂に会して、先祖や故人を偲ぶ最もよい

機会である。集団的な里帰りは、親戚や友人との連帯感を高め、故郷を思う心を新たにし、その中で自分自身のアイデンティティを高めるという働きもあろう。里帰りを通して、町興しや地域のビジネスの活性化や人と人のつながりを強めることで、地域での一体感が一段と高まっていくことが期待できる。特に、飛島の場合はお盆の時期は観光シーズンと重なり、旅館・民宿では、猫の手も借りたいほど忙しさである。それが、墓を島外に移すことによって、里帰りの必要性はなくなり、逆に島の住民は島外の墓参のために、島から出ていくことになる。その結果、里帰りの効用が低下して、「故郷」の意識も急速にさめていく恐れがある。これは、島の住民にとって深刻な問題だといわざるをえない。

また、数年前に飛島小中学校が休校になった時、島民の子どもがいつか島に戻れるように再開の期待を込めて、酒田市教育委員会が飛島小中学校を「廃校ではなく休校」とすることを決定したが、墓を移すことは住民が島から完全に離れることであり、学校の再開は諦めざるを得ず、事実上、「廃校」となった。

一方、海の散骨代行会社―セキセ（株）の担当者平野哲によると、東京あたりでは、墓地を買いたくても高くて手がでず、遺骨を自宅に安置している人が100万人以上はいるともいう。毎年に墓の離島で荒廃し寂しくなっていく飛島の墓地事情とは好対照である。

最後に、北海道、本州、四国、九州、沖縄本島を除き日本には6,847の島嶼がある。そのうち、飛島のように昭和28年に設定された離島振興法の対象になっている島は280余りである。[5]中でも、最近、「老後の天国」として沖縄の石垣島などで人口が急増して、全国的な関心を集めている。[6]

その反面、飛島のように次第に無人島化していこうとしている島にはほとんど関心がもたれていない。しかし、飛島の抱えている問題こそが、山形ひいては「日本島」の未来を暗示しているともいえる。飛島の課題をそのまま放置すれば、飛島人はやがて「絶滅寸前人種」になり、世界保健機構の保護対象になるかもしれない。そして、飛島文化

5 「ようこそ！島の活性化ホームページへ」http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/

6 「安易な移住続々、職なく行き詰まり・・・楽園の困惑―人口急増の石垣島困惑」読売新聞夕刊、2005,4,12.
「沖縄県石垣島。台湾の目と鼻の先にあるこの亜熱帯の島では、ここ数年、本土からの移住者が急増している。青い空と海、温暖な気候にあこがれて、首都圏などから島にやってくる人々がほとんどだが、突然、大挙して移住者が押しかけてきたことで、困惑も広がっている。石垣市によると、住民票の異動だけを見ても、一昨年から島の転入人口は約3,000人も増加している。これに、住民票を異動しないで生活をしている人も含めると、その数は5,000人に達するという。沖縄県全体では、同じ2年間で約5万1,500人が本土から移り住んでいるが、転勤などで沖縄本島にやってきた人も多く含まれているとみられる。石垣市の現在の人口は約4万5,000人」

を理解するための資料は、わずかに残る酒田でそれを探さなければならなくなるだろう。そして、日本の文化を知るためには、中国や韓国などの近隣諸国へいかなければならなくなるかもしれない。今回の調査にあたり、通過儀礼の考察は、単に儀礼にとどまらず、家族、親族、宗教、地域の相互関係や広範囲な会問題なども深く繋がっていることを改めて考えさせられた。（数値は2006.8.16現在）

五．要約

超少子化・高齢化、過疎化により、飛島における独特な風習が次第に失いつつある。通過儀礼における出産儀礼がほとんど崩壊し、人生最大の節目である結婚式と葬式も全部酒田市内に移り、結婚式場と葬祭センターで儀式を行うことになった。その結果、儀式や内容などがほとんど全国均一化してきた。そのため、かつて漁村の特徴であった強い地域・近隣関係や相互扶助などはかなり薄くなった。現在飛島に残っている人生の通過儀礼は端午の節句、厄払いと長寿祝いだけである。この三つの儀式の共通点は忌み嫌う風習がもたらす厄払い儀式である。通過儀礼の変化がもたらした最も注目されている社会問題は、島民の精神を支えている墓の移転問題である。これにより今後島の最大の節目であるお盆にどれぐらい影響に与えたかを次回の課題にしたい。

今回の論文に協力して頂いた以下の方々に心より感謝する。
協力者：斉藤正一（81歳）宮司（社家）・飛島中学校元教員、太田惣一（75歳）飛島中村地区区長、西村和夫（66歳）飛島勝浦地区区長・山形県指導漁業士、西村静子（65歳）西村食堂の女将、斉藤ヨシ(78歳) 民宿ひかりの女将、斉藤友一（76歳）漁師、斉藤春吉（80歳）漁師、本多武覚（36歳）酒田市龍厳寺住職、平野哲（セキセー株式会社IT推進室）

参考文献：

酒田市史編さん室『酒田市合併村史』第二巻、酒田市、2001.
『飛島』関西学院大学文化総部地理研究会、1999.
網野善彦『日本海と北国文化―海と列島文化』第１巻、小学館、1990.
長井政太郎『飛島誌』国書刊行会、1982.
斉藤昇『生きている飛島』酒田市立飛島小学校、1976.
斉藤美澄『飽海郡誌（下）』山形県飽海郡役所、1973.
『鳥海山・飛島』山形県総合学術調査会、1972.
『山形県の民俗資料-民俗資料緊急調査報告』山形県教育委員会、1965.
『郷土研究叢書』（第五軒）山形県郷土研究会、1935.
宮本倫彦『島と漁民』協調会、1934.
早川孝太郎『羽後飛島図誌』郷土研究社、1925.

The Change in Rites of Passage on Tobishima Island, Sakata City, Yamagata Prefecture —The case of a depopulating and aging society

You, Ming-Hwang
Sugiyama, Makoto

Since the turn of the 20th century, modern society has had a profound impact on the way people think and the value they place on their past. Similarly, the most important phases in the rites of passage of life have not been excluded in this wave of change, particularly in old cultures. Behind this change is the acceleration of the depopulation of some older societies.

There is one small island, Tobishima Island, off the coast of Yamagata Prefecture, that highlights these changes. It takes ninety minutes from Sakata Port to Tobishima Katsuura Port by the "New Tobishima" ferry. The small and remote island measures 2.32 km² and has a circumference of 10.2 km. In 1940, there were 1788 islanders on Tobishima. Today, according the registration of the households in the island, there are only 301. Meanwhile, along with the sharp decline in population on the island, the birthrate has decreased and the population has aged.

Starting from the beginning of the Jomon period (13,000-300BC), islanders off the main island of Japan have possessed many unique and valuable cultural treasures. But many traditional cultures and customs have been fading away because fewer and fewer islanders are able to learn the ancient cultural ways of living, or pass down their traditional skills to the next generation, a direct result of the rapid aging of the population and increase in childless families.

Under the background of this society, this paper will discuss the changing procedures and characteristics of rites of passage on Tobishima Island based on the results of a field trip to the island. In addition, social problems will also be examined and discussed.